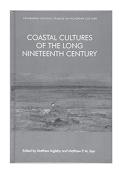
書評

Matthew Ingleby and Matthew P. M. Kerr, eds., Coastal Cultures of the Long Nineteenth Century (Edinburgh: Edinburgh University Press, 2018)



芝 奈穂

本書は、18世紀終わりから第一次世界大戦勃発までの「長い19世紀」において、海辺に向けられたイギリスの文化的イマジネーションを探究した研究書である。"coastal imagination" (海辺のイマジネーション)というテーマはアラン・コルバンの『浜辺の誕生 — 海と人間の系譜学』(1988) や James Hamilton-Paterson の Seven-Tenths: The Sea and Its Thresholds (1992) 等で考究されてきたが、本書は、これらの先行研究で追究されてきた事柄を、「長い19世紀」における「イギリス」に焦点を絞り論じたものと位置付けることができる。「序論」(Ingleby and Kerr)で述べるように、ナポレオン戦争から第一次世界大戦にいたるまで、イギリスは文字どおり海の覇者であり、イギリス政府のみならず、イギリス人一般は国内だけでなく、より一層海外へ目を向けるようになった。芸術家、作家、自然科学者、旅行者、移住者、社会改良家、帝国主義者等が海岸を訪れ、想像力を培い、それを発揮したのである。

本書は、この時期のイギリスの思考がどのようなものであったかという 観点から、海岸のイマジネーションを考察し、イギリスの「海辺の文化」を インターディシプリナリーなアプローチで探究した好著と言えよう。多く の人々は海辺に魅せられ、探訪し、出会い、それぞれに影響を与え合った。 海辺はいわば「出会い」あるいは「遭遇」の場として大きな力を振るい、そ の結果、新しい考え方や価値観、技術革新へのヒントを与える空間ともなっ たのである。

本書は「序論」と「エピローグ」の間に13の論文を掲載している。全体は2部に分けられ、第1部は "In the Shadows of War" の見出しのもと、第1

章から第7章までが、第2部は"Marginal Progress"として第8章から第13章までが収められている。しかし、この区分けは一見したところ必ずしも明瞭ではない。「序論」によれば、第1部は海辺を戦争やモダニティーの脅威も含めた「衝突」の場として、第2部は「進歩」の場として捉えている。しかし、各章で扱われているトピックについては、いずれの区分にも合致しにくい、もしくは両者にまたがるような事例もあるように思われる。インターディシプリナリーゆえに、キーワードは"coastal imagination"の一語のみであり、そのため、それぞれの論文が独立し、扱う題材も各人各様にわたるので、区分けに苦労したであろうことが窺える。

以下、インターディシプリナリーなアプローチごとに分類し、本書の内容を紹介し、そのアプローチの意義を述べたい。各章を概観するならば、文学的アプローチが6編、社会学的アプローチが4編、絵画、写真等の視覚文化的アプローチが3編という構成になる。

文学の分野が多いが、トピックや切り口は異なる。Fanny Burneyの小 説 The Wanderer (1814) におけるブライトンの描写と海岸イマジネーション の果たす役割(第1章)、R. L. Stevensonの短編 'The Merry Men' (1882) と Tennysonの詩 'Sea Dreams' (1860) に見られる資本主義世界や帝国主義的 価値観に対する葛藤(第5章および第7章)、海洋生物学と小説との関わり (第9章および第10章)、Arthur Symonsの詩作における海の表象(第13章) がそれらであるが、ここから統一的な主張を汲み取ることはやや難しい。 とはいえ、"coastal imagination"をキーワードにそれぞれの作家や詩人と 海辺との関わりを探究した意義は注目されてよい。さらに、これらの章の ほとんどに共通するのは、彼らの残した日記や論文、専門書等から彼らと 海に関わる事象および事実を抜き出した上で、それぞれの作家の作品の 一つに焦点を当て、それらをクロスレファレンスさせて、作家の "coastal imagination"を導き出すという手法である。たとえば、第9章 (Margaret Cohen)では、新しいフロンティアへの関心として、「海洋生物学」が発展 した時代において、海洋生物との遭遇がいかに文学作品に投影されたか という問題を探究する過程で、著者は、Charles Kingsleyによる博物学書 Glaucus; or, The Wonders of the Shore (1855) の分析を通じて、そこで描写され ている水中生物の特徴である metamorphosis (変容、脱皮) というテーマが

202 芝 奈穂

彼の児童文学作品 The Water-Babies (1862-3) にも応用されていることを鮮やかに論じている。

次に多いのは、社会学的アプローチである。急進的ホイッグの政治家 Henry Brougham による地中海の町カンヌの発見(第3章)、1880年代海岸 リゾートでの禁酒運動をめぐる衝突の行方(第4章)、アフリカ東海岸のス ワヒリ文化に属する2つの玉座としての椅子が有する意味(第6章)、1850 ~1860年代にかけての大西洋横断電信ケーブル敷設にまつわる話(第8章) など、これまたトピックは多岐にわたる。とりわけ、第6章と第8章は大 枠で、イギリスの関係諸国への接触という題材を追究しており、いずれも ユニークな方法論を用いている点が特筆に値する。第6章(Sarah Longair) では、植民地時代にイギリスによって獲得され、今日、大英博物館に所蔵 されている2つの椅子の分析を通じて、アフリカ東海岸のスワヒリ文化と イギリスの関係を捉えているが、その椅子が持つ意味は、その時によっ て、場所によって、さらに、所有する者によって異なるということを「物 質文化研究」(material culture)というアプローチを用いて示している。第8 章 (Brian H. Murray) においては、著者は、電信ケーブルの敷設は、当初、 イギリスとアメリカ合衆国の間の大西洋を越えたアングロ・サクソンの 人々の結びつきと優位性を象徴するものとして捉えられたが、その発着点 である両沿岸の町、ヴァレンティア島とニューファンドランド島は、当時、 カソリックのアイルランド人が大半を占める地域であったことに着目して いる。すなわち、この章における著者の意図は、それ自体非常に興味深い 電信ケーブル敷設の過程をたどることではなく、それをとおして、アング ロ・サクソン世界とアイルランドの人々との間の関係を描くことにあった。 視覚文化的アプローチでは、19世紀半ばにおける Gustave Le Gray の海 岸風景写真の論考(第11章)が当時の写真技術への言及を含み、かなり専 門的な論文となっている。John Constable の海岸風景画の重要性(第2章) および海岸リゾートにおける労働者の肖像写真(第12章)は、それぞれ、 これまでよく知られてきた事象に新しい切り口を与えており、期待を裏切 ることがない。第2章(Christiana Payne)は、内陸の田園風景を得意とす る画家として有名な Constable にとって、海辺の絵画はどのような意味を 持つのかという問いに答えるものである。19世紀前半に描かれたブライト

ンやウェイマス、ヤーマス等の海岸の絵画を丹念に分析しながら、著者は、Constableにとって海岸とは、「生と死の境界線」を象徴するものであり、敵の侵略を防ぎ伝統を守る境界線としての役割を持つ場所であり、また、「空と天気」という点において彼の画法に小さからぬ影響を与えた場所であると論証している。第12章(Karen Shepherdson)については、一般的に、ヴィクトリア朝の海岸リゾートの発展と労働者階級のレジャーについて考察した論考は枚挙にいとまがないが、それを被写体としての労働者の商業写真を媒体に論じている点にオリジナリティが認められる。

このインターディシプリナリーなアンソロジーについて、イギリスが海を支配したこの時期の海辺に焦点を絞り、読者に新たな視点を提示した点は高い評価に値しよう。19世紀を研究する者、とくに、ヴィクトリア朝研究者にとって、本書を開ければ必ずやその章のどこかにインスピレーションを与えられることは間違いない。とりわけ、自然科学の分野である海洋生物学的観点からみた"coastal imagination"というテーマには、独自性と限りのない広がりを感じさせられる。同じ枠組みでたとえば、イギリスを海洋国家とするのに最重要な役割を担った航海術や天文学からみた"coastal imagination"論も可能になるかもしれない。さらに、方法論や手法という点においても、先に述べたとおり、その領域の一級の研究者による新しい試みが見られ、今後の文化研究にとっての必読書であると言えるだろう。19世紀におけるパブリック・スペース、広義でのランドスケープ・スタディーズを専門とする評者にとって、本書で扱われた"coastal imagination"というテーマは、"coastal landscape"という枠組みで読み得る可能性を示唆するものであり、多大なる刺激を受けたことを付け加えたい。

——愛知学院大学准教授